World View アジア発

シリーズ「アジアほっつき歩る記」第８回

南新疆の漢族化

須賀　　努
コラムニスト・アジアンウオッチャー

新疆ウイグル自治区訪問は昨年の夏の北新疆（ウルムチからイリまで）、本年冬のカシュガルに次いで３回目となった。今回は南新疆を行く、ということで、世界第２位のタクラマカン砂漠を縦断、ホータン、アクス、クチャ、コルラなどの街を訪れ、その状況をつぶさに見て来た。

ホータン　玉の夢

タクラマカン砂漠の南、天山南道に位置するホータン（和田）は歴史上ではウテンとして1000年続いた国、法顕や玄奘も訪れた仏教が盛んな場所として登場する。現在もウイグル人が多数を占めている地域。そして何より玉（ヒスイ）が有名であり、最近のブームでは、玉長者が多く出たという。実際ウルムチには１つの素晴らしい玉を売り、一等地にビルを建てたなどと言う夢物語のような話がいくつもある。

ホータン市内の玉の交易所に行くと、スーッとウイグル人の男が寄ってきて、無言で手を出す。手を広げるとそこには玉が握られており、品定めして買え、という意味だと分かる。これは実に原始的な交易手段だ。シルクロード時代もこのように言葉が通じなくても交易が行われていたことを示している。今では街中、玉屋だらけであり、一体誰が買うのかと思うほどだが。

この玉、漢族もウイグル族も買うようだが、金などと異なり、市場価格もなく、預金するより将来性があると言って買われる物でもないらしい。資産価値は定かでないが、それでもお金があると買う、何だか何かに幻惑されているようだ。これもオアシス都市の罠だろうか。

また交易所近くの河を見ると、夏場にも拘らず、数人が河原をサラっており、未だに一攫千金を目指している者がいることに驚く。ここホータンには古来絹織物や絨毯が有名だったが、現在は他の地域に押されており、残念ながら目立った産業が見当たらず、街の勢いも感じられない。

写真１　アクスの国営農場　リンゴ紅富士の宣伝

アクスの国営農場

ホータンから世界第２位のタクラマカン砂漠を縦断すること500㎞、アクスの街がある。因みに砂漠の道は一本道の高速道路で実に快適。ここではスピード制限が瞬間ではなく、XX 時間以上掛けて砂漠を通過することという合理的な手法で面白い。

アクスもまた、それほど発展がみられる街ではない。あまり産業もないとのことで国営農場を訪問してみると、会議室はスイカやメロン、桃などフルーツの山。以前は野菜や小麦なども作っていたが、今ではフルーツに特化している。特にここでは「紅富士」というブランドのリンゴが特産となっており、

撮影：佐渡多真子

【須賀努氏のプロフィール】
東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾２年、香港通算９年、北京同５年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

写真２　ルンタイ　巨大国有石油会社の地域統括ビル

中国沿海部などで結構高く売れているという。名前からして日本の技術かと聞くと「山東省から持って来た技術だが、オリジナルは日本だと思う」との答え。日本の技術で美味しいリンゴが出来るのは嬉しいが、何となく釈然としない。というより、日本はもっと先手を打って、例えばこの新疆の地で、フルーツの共同栽培などを行えば、更に価値の高い商品となるのだが。

実際にリンゴを作っている農家も訪問した。リンゴの技術が導入され、高く売れるようになり、生活も安定したというが、技術が日本の物だということははっきりとは知らない様子。村人の中には、増加した収入で、村に建設された新しい住宅を購入する者まで出て来ている。これは中国政府が掲げる農村の都市化の一つの形なのかもしれない。

新疆の資源基地　コルラ

アクスからコルラへ向かう途中にルンタイという街があった。決して大きくはないその街は解放後中国政府によって作られた街。近年の政策「西汽東輸（中国西部の天然ガスを東部沿岸地域に輸送する）」の起点は、実はここルンタイにあるようで、何もない大地に忽然と中国大手石油会社の大きなビルが建っていたりする。

ここからさらに東に進むとコルラに到着する。この街、相当に活気があり、店などもウルムチに次ぐ規模で並んでいる。この発展も資源に支えられているのは間違いがない。昔はシルクロードのオアシス都市であり、人口も少なかったが、1960年よりここがバインゴリン・モンゴル自治州となり、モンゴル族の街となる。現在では70％以上を漢族が占め、街でモンゴル族を探すのは難しい。

これは貴重な天然資源を自由に開発するため、ウイグル族より組みし易いモンゴル族の自治州として、実質的に漢族が支配している、と指摘する向きもある。資源確保に躍起となる中央政府の姿勢が垣間見られる。

郊外へ出てみると、ここも農村と都市の中間で不動産開発が盛んに行われており、市政府も郊外に移転している。農村の都市化は国家政策であるが、地方ではこれ幸いと住宅を作り、資源その他で金を手にした人々に買わせている。村を挙げて、街を挙げて、土地開発を行う姿は、以前の沿海部の開発をそのまま内陸部へ持って来たようで、少し心配になる。

今回の南新疆訪問では、ホータンやアクスなど伝統的なウイグルの街の低迷とコルラなど、漢族化し、資源を武器にした発展という２つの対局を見た。新疆を見る時、単にテロや暴動がある場所として捉えるのではなく、そして日本企業がなかなか入れない資源産業の場としてのみならず、農業その他、色々な可能性で見てみる必要があると思われた。同時に少数民族の置かれた厳しい現実も垣間見れ、憧れのシルクロードはその昔、何となく複雑な心境となった。